

日本語初対面会話における話題導入の相互行為

— プロセスと対人関係機能 —

大 谷 麻 美

1. はじめに

会話の中での話題管理が、会話の参加者達の相互行為によって遂行される事は周知の通りである。とりわけ背景知識を共有しない初対面会話では、既知の者同士の会話とは違い、参加者達はより慎重に相手との距離を測りながらその相互行為に従事するであろう事は想像に難くない。そこで本稿では、日本語初対面会話を対象として、その話題開始部にみられる話題導入の相互行為を、候補話題導入から話題化までの過程に焦点を当てて記述・分類する。その上で、話題導入の際にどのような対人的配慮が行われているのかを考察する。

2. 先行研究と本研究の枠組み

2.1 話題

談話における話題 (discourse topic) の定義は、研究者によって非常に多岐にわたるが、本稿では特に話題の相互行為性と連続性に着目する。

Bergmann (1990) は、話題は1人の話者によるものではなく、会話参加者達が共同作業で作ri出すもの (joint production) だと述べる (p. 204)。また串田 (1997) も、話題とは「伝達されるものではなく」「会話者たちが相互行為的に作り出す」もの (p. 177) と説明する。特に、対面会話 (face-to-face interaction) における話題の管理は、会話参加者たちの大変な労力による産

物だとされている (West & Garcia, 1988, p. 551)。

また Brown & Yule (1983) は、談話における話題を特定すること (pin down) は難しく、特定しようとするると直感的なものになりがちで失敗しやすいと述べる。そしてそれは、話題が関連性 (relevance) や連続性 (coherence) といった概念と結びついているからだと説明する (pp. 68-70)。また、村上・熊取谷 (1995) は、話題が階層構造とともに、派生や再生をしながら連続構造を形成する様子を記述している。南 (1981) や Foppa (1990) も、日常会話やインフォーマルな会話ではそこに定まったゴールはなく、話し始めと話し終わりではその内容がすっかり変わってしまうことがあると指摘し、話題が連続性を持って推移することを明らかにしている。これらの話題の連続性は、話題区分を行う試みにおいて、人によってその区分箇所が大きくなばらつきが現れる事を示した河内 (2003) や大場・中井 (2018) の研究によっても裏付けられる。この2つの研究は、話題の切れ目を特定することがいかに困難であるか、言い換えれば、話題が複雑に連続性や関連性を保っているという事実を示している。

本稿ではこれらの先行研究を踏まえ、談話における話題を「会話の中で話されることで、参加者達の相互行為を通じて関連性を保ちながら移り変わるもの」と定義する。

2.2 話題開始部

話題の連鎖構造には、話題が関連づけられながら切れ目ない連鎖によって展開する場合 (stepwise movement for topics 切れ目無いトピック推移) と、明確な連鎖の切れ目が見られる場合 (bounded movement for topics 境界づけられたトピック推移) とがある (Sacks, 1992; 串田, 1997)。本調査の話題開始部とは、前の話題とは明確な切れ目を示す「境界づけられたトピック推移」の開始部を指す。

境界の判定には、話題の関連性に加えて言語的・談話構造的な特徴も考慮して決定を行う。話題内容の関連性の有無だけに依存したのでは、先述の指摘のよ

うに主観的になりがちで、客観的に境界を決定する事が困難になる可能性があるからである。話題内容の関連性が途絶えたと思える箇所、かつ、先行研究 (e.g., Reichman, 1978; メイナード, 1993) で明らかになっている話題転換部の言語的・構造的特徴 (韻律の変化、ポーズや沈黙の出現、文脈転換の明示的表現の使用、限られた反応¹⁾の出現、まとめや評価表現の出現等) が見られた箇所を話題の境界と判断した²⁾。そして、その後新たに会話が始まる部分を話題開始部と判断した。

2.3 話題導入の相互行為

話題開始部で、新たな話題を開始しようとする試みを話題導入と定義する。話題導入に関する研究の中で、特に相互行為とそこに見られる談話構造を詳細に分析しているのが Button & Casey (1984, 1985) である。彼らは英語の2人会話をデータとし、話題が導入されるプロセスを詳細に記述・分類している。彼らは、話題導入部の最初の発話 (以下、導入発話とする) には、相手からの話題を誘い出す topic initial elicitors (話題の誘い出し) と、候補となる話題を自らが提示する topic nomination (話題提示) の2種類があるとする。前者は “What’s new?” “Anything else to report?” (Button & Casey, 1984, p. 168) のように、話題の有無を問うことで相手に候補となる話題 (以下、候補話題) を求める発話である。一方、後者は話し手自らが候補話題を提案する発話で、その下位分類として、相手に候補話題を投げかける itemised news enquiries (情報照会) と、自らが候補話題を語り始める news announcements (情報公開) がある (図1)。

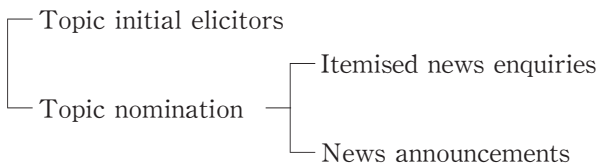


図1 話題導入の発話 (Button & Casey, 1984, 1985に基づき筆者が作成)

以下の引用例 a は itemised news enquiries の例である。話し手 Shirley が Geri に共通の友人 Dana と今週話したか否かの情報を照会することで (01行)、「Dana との会話」が候補話題として導入される。

引用例 a

- 01 Shirley : D'yih talk tih Dana this week?
02 Geri : •hhh Yeh I talk 'tih Dana uh::m (0.4) •tch
03 k •hh (0.4) ° uh::m°
04 (0.5) Monday night I gue:ss.

(Button & Casey, 1985, p. 11) (行番号は筆者による。以下同様)

一方、引用例 b は news announcements の例である。Ilene が自らの情報 (ショッピング) を語る事で候補話題を提示している (01-02行)。

引用例 b

- 01 Ilene: I've jus' got u-I've jus' been getting suh-uh
02 buying uh doing my shoppin: g
03 Joyce: You ha: ve
04 Ilene: An' getting the various bits of biscuits'n stuff
05 in.

(Button & Casey, 1985, p. 24)

このように、導入部ではまず候補話題が導入される。それに対して相手が候補話題を承認したり拒否したりしながら話題は交渉されていく。引用例 a では、候補話題に Geri が肯定的返答 (Yeh) を返して (02行)、Dana との会話について話し始めることで話題が進んでいく (02-04行)。また、引用例 b では、03行目で Joyce が関心を示す肯定的返事 (You have) を返すことで話題が承認され、04行目以降で Ilene はショッピングの話題を話すことができている。

る。このような候補話題を取り上げて話題となるよう促す発話は topicalizer (話題化発話) (Button & Casey, 1984, p. 167) と呼ばれ、候補話題が正式に話題として認められて具体的に語られる (話題化) 重要な契機となる。

一方、日本語の話題導入の相互行為の研究には、宇佐美・嶺田 (1995)、宇佐美・野口・木村 (2014) がある。これらの研究の主たる関心は、話題の展開構造と参加者達の関係性にある。話題導入部に関しては、相手との年齢差、性差により、導入発話を行う者、導入形式 (質問形式か叙述形式か、完結型発話か中途終了型発話か)、話題の志向性 (話し手の話題か、聞き手の話題か) 等の量的調査が中心となっている。その結果、年齢の上の者が聞き手志向の話題を導入する傾向が強いこと、話題開始部の相互行為については「質問形式での話題導入が大半を占める」(宇佐美・嶺田, 1995, p. 138) 等が明らかとなっている。ただ、調査の焦点は導入発話で、話題化するまでの相互行為については多くは言及していない。

日本語会話を対象とした他の研究には、中井 (2002)、楊 (2005, 2011)、林 (2008) 等がある。これらの研究は外国語教育を視野に入れたもので、日本語と他言語、あるいは日本語母語話者と日本語学習者の間での比較対照研究である。そのため、比較しやすい話題開始部の疑問文、使用表現等に焦点を当てた量的分析が中心で、相互行為のプロセスには踏み込んでいないものが多い。ただその中で楊 (2011) は、量的研究ではあるものの、話題導入から話題化までのプロセスを分類している。この研究は日本語と中国語の初対面女性の会話をデータとしており、話題化までのプロセスを「即時的開始」と「漸次的開始」に分類し、中国語には前者が多いのに対し、日本語では両者が拮抗し、話題導入の形式が定まっていないとする。また、「漸次的開始」をさらに下位分類し、日本語では中国語に比較して一方が過度に話題をリードするのではなく、相手の様子を見ながら徐々に話題を確立する傾向が強いと指摘する。ただ、言語教育を前提とした話題導入のプロセスの類型化とその傾向の比較が焦点で、話題化までの具体的かつ多様な相互行為の実態の記述は行われていない。

このように、日本語の話題導入部に関する研究は、話題導入発話に関する量

的分析は多いが、Button & Casey (1984, 1985) のような話題化までの詳細なプロセスに関する質的研究は少ないといえる。

3. 研究目的

これらの先行研究を踏まえ、本稿では日本語の会話を対象に、話題導入のプロセスを質的に分析する。分析の足がかりとしては、Button & Casey (1984, 1985) の分類を用いる。候補話題が肯定的、否定的に受け止められ、具体的に話題化されるまで、あるいは却下されるまでにどのようなプロセスをたどり、そこでどのような相互行為が生じているのかを明らかにする。またそれら相互行為に、どのような対人関係への配慮が含まれているのかを考察する。

4. データ

データには、8組 (JA1～JA8) の日本語母語話者の会話をを用いる。会話参加者はいずれも男性で、各組3人の会話である。多人数会話 (坊農・高梨, 2009) を対象とした理由は、2人会話では参加者は必然的に「話し手一聞き手」の関係に振り分けられるが、多人数会話では、それに加え「傍参与者」として会話に参加する可能性があり、より複雑で現実的な会話場面を作り出すことができると考えたからである (Kerbrat-Orecchioni, 2004 ; 大場, 2012)。会話参加者を男性に統一したのは、先行研究で指摘されているような性差から生じる力関係や話し方の相違 (e.g., Tannen, 1990a, 1990b; Abu-Akel, 2002) を避けるためである。会話参加者は20代の大学卒業以上の学歴を持つ者で、ほとんどが大学院生である。収録は名古屋と東京で行ったが、参加者の出身地は日本各地に分散している。参加者達は本調査のために集められた者で、この実験会話で初めて出会う者同士である。既知の者同士の会話は、それまでの人間関係が会話のスタイル等に反映されやすいが、初対面会話は人間関係が未だ構築されていないため、各組の実験条件を統一しやすい利点がある。また、仲間

内の言葉使いや話し方を排除できる利点もある。

教授宅でのホームパーティーで3名が偶然同席したと仮定し、それ以外は会話テーマなどは決めずに自由に会話を行わせた。会話時間は各30分で、合計で4時間である。最初に参加者達が挨拶を行ったり、互いに名乗り合ったりする儀礼的な部分は排除し、実質的な会話が始まった部分を分析対象として用いた。会話は録音、録画した上で、文字おこしをしてデータとして用いた。

5. 分析

2.2節の話題開始部の定義ののっとりデータを分析した結果、開始部の数は表1の通りとなった。その数はグループによりかなりばらつきがあり、沈黙などの明確な切れ目を挟みながら細切れに話題が推移するグループでは話題開始部の数が多く、話題が切れ目無く継続するグループでは少なくなっている。

表1 話題開始部の数

グループ	JA1	JA2	JA3	JA4	JA5	JA6	JA7	JA8	合計	平均
話題開始部数	18	8	11	7	5	19	3	14	85	10.6

次に、各開始部の話題導入発話を Button & Casey (1984, 1985) の分類(図1)に沿って分析したところ、topic initial elicitors で始まる開始部は1つも見られず、すべてが itemised news enquiries か news announcements によるものであった。以下では両タイプの導入発話から、どのように話題化に至るのかを記述する。

5.1 Itemised news enquiries による話題導入

Itemised news enquiries は、データ中に頻繁に見られた話題導入発話である。その導入後、相手が肯定的反応を示して話題化に積極的に関わる事例と、あまり関心を示さない否定的反応を示す事例とが見られた。以下ではそれぞれ

の例を示す。

例1は候補話題が即座に話題化され、ほとんど交渉が見られない例である。J40がJ41に向けて、「え、専攻は？」と情報の照会を行うことで候補話題が導入されている。それに対してJ41は即座に自分の専攻（アートマネジメント）や経歴などを詳細に説明し始め、これが話題として成立する。

例1 JA2（即座の話題化）

- 01 J40：え 専攻は↑
02 J41：あ 僕は@ え:::と アートマネジメントをやっています。
03 でえ:::と 前は〇〇大学であの:: え:::と
04 コミュニケーションデザインをやっていたので
05 そこから え:: ちょっとコミュニケーションを
06 ちょっと深めたくて△△に移って
07 ちょっとアートを使ってコミュニケーションをできないかな@
08 と [いうことをやっています].
09 J40： [アートを使って] コミュニケーションって
10 具体的にどういうことなんですか↑

しかし、この例のように itemised news enquiries による候補話題がすぐに話題化される事例は本データ中では比較的少なく、多くの例では話題化されるまでには様々な交渉が見られた。

例2では、相手の反応を見ながら情報を段階的に提示することで話題化が行われる例である。J38がJ43に所属するサークルを尋ねることで候補話題を導入している（01行）。それに対し、J43は「あ、僕は、ずっと空手やってて」と最小限の情報提供を行うのみで、詳しくは語らない（02行）。これにJ33が「おおー」と関心を示す肯定的返答を行っているが（04行）、この発話が話題の承認（topicalizer）となり、これを契機に06行目以降でJ43が空手について詳細に話し始める。このように徐々に情報を求めたり提供したりしながら話題化

へ繋げていくプロセスが多く見られた。

また、ここには多人数会話ならではの協働的话题導入を見ることができる。候補話題の提示は J38から J43に向けて行われ、ここでは J38が話題導入者、J43が受け手、J33は傍参与者となっている。しかし、topicalizer の投げかけは話題の導入者ではなく傍参与者の J33によって行われており、話題導入者と傍参与者が協働して J43に話題を語らせようとしている様子が見て取れる。

例 2 JA7 (段階的话题導入 傍参与者による話題化)

- 01 J38: 何か他にサークルとかは↑
 02 J43: あ 僕は ずっと空手やってて.
 03 J38: 空手↑
 04 J33: [お:::::] ← (Topicalizer)
 05 J38: [ふ:ん]
 06 J43: ずっと小学生ぐらいからやってるんですけど.
 07 J38: あ けっこう長い. [今も] ですか↑
 08 J43: [はい]
 09 今も あ 今一応引退してるんで OB みたいな形ですけど.

例 3 では、例 2 よりもさらに入念なやりとりで話題の導入が行われている。この会話はある工業大学で収録が行われ、J41は、この大学の在校生である J40に対して「ここって工業大ですよ？」と情報照会を行い候補話題を導入する (01行)。さらに「ということは女子少ないんですか？」(03行)、「ほぼ男子校ですか？」(05行) と段階的に情報照会を行っていく。それに対して J40 は、J41の発話の一部を繰り返すだけの最小限の返答(「工業大」(02行)、「女子少ないですよ」(04行)) を返すのみである。06行で女子が 1 割しかいないという情報を得た後、07行で J38が「へーえ、あ、そんな偏りがあるんですね」と驚きの声を上げる。この J38の関心を示す発話が topicalizer となって、J40 が08行目から女子学生の少なさを具体的に語り出す。段階的に質問を繰り返す

ことで、他の参加者の興味を確認しながら、入念に話題の核心に近づこうとしている例である。

また、話題導入者ではない傍参与者の J38が topicalizer を投げかけている点から、ここでも話題導入者と傍参与者の 2 人が協働的に話題導入を行って、J40に語らせようとしている様子が見て取れる。

例 3 J A2 (段階的話題導入、傍参与者による話題化)

- 01 J41: ここって工業大学ですよね↑ =
02 J40: =工業大.
03 J41: =ということは女子少ないんですか↑ =
04 J40: =女子少ないですよ.
05 J41: ほぼ男子校ですか↑
06 J40: ほぼ男子. まあ大体 1 割 1 学年 1 割っていうところですね.
07 J38: へ::: あ [そんな偏りがあるん] ですね. ← (Topicalizer)
08 J40: [まあ大体1,000人] 1 学年いるんで
09 大体学年で100人ぐらい.
10 J41: <WH [あ:] WH>
11 J40: [学科] になると 5 パーセントとかそれぐらい.
12 僕 (.) のいる学科だと そうですね 5 パーセントぐらい.
13 にゆ新入生230人いたんですけど
14 数えたら女子10人しかいなくて@@

このように、驚きや関心を示す発話が topicalizer として機能する以外に、共話が topicalizer となる例もある。例 4 では、その前の話題で就職活動の話をしていたのを受けて、J24が「求人とかあるんですか」と候補話題の導入を行っている (01行)。それに対し、J25が02-03行で就職説明会での様子を返答する。続く04, 05行は、03行の文末の中途発話を受けた共話になっており、「一応、だから、説明会で今年は何人、こういう人を雇いまーすとか言ってま

すけどー、果たして本当? みたいになっていうのと、そこに何人応募するんだろう? っていう」という発話を作り上げる。それを契機に就職活動についての愚痴を3人が語り始める(07行-)。このような共話は、参加者間に共通の理解や認識があって成り立つものである。そのため、この共話によって参加者の間に候補話題について共通認識がある事を示す事ができ、話題化の契機となり得たのである。

例4 JA1 (共話による話題化)

- 01 J24: でも どうなのかな↑ で求人とかあるんですか↑
 02 J25: 一応 だから 説明会で 今年は何人 こういう人を雇いま::す
 03 とか言ってますけど::
 04 J24: 果たして本当↑ みたいな ← (Topicalizer)
 05 J25: っていうのと そこに何人応募するんだろう↑ [ていう]
 06 J26: <WH [うんうん] WH>
 07 J24: ああ. みんなそんな感じなんですかねえ↑
 08 J25: そんな感じじゃないんでしょうかねえ↑
 09 あとは推薦とか どうなってるのか知りませんが.

一方、導入された候補話題は、常に肯定的にとらえられて話題化されるとは限らない。他の参加者がその話題に気乗りしない事例もある。例5では、J37が候補話題(修論のテーマ)をJ40に投げかける(01行)。しかしJ40は「いや、わかんないっすね」と、この候補話題を積極的に話そうとはしない(02行)。そこでJ37は候補話題をより具体的に「どっちかですか、どっちで書くかとかその?」と掘り下げて問い直している(04行)。実は、同じ会話の自己紹介の箇所で3人は各自の研究について話をしており、その中でJ40は自分の関心のある研究テーマと、指導教官から与えられたあまりやりたくない研究テーマがあると話していた。04行目のJ37の発話はそのやりとりを踏まえたもので、そのどちらのテーマを書くのかを具体的に問うている。最初の候補話題(修論のテ

ーマ)には消極的であったJ40も、候補話題をより具体的に問われると、05行目以降で語りは始めている。このように候補話題が相手に積極的に受け入れられない場合には、話し手は話題をより具体化したり掘り下げたりして、候補話題を再導入することで話題化を促進する。

例 5 JA6 (具体化による候補話題の再導入)

- 01 J37: 修論は(.) もう決まってるんですか↑ 書くことは.
02 J40: いや(.) わかんないっすね. [@@ 1]
03 J37: [@@ 1]
04 どっちかでか どっちで書くか [とかその 2] ← (再導入)
05 J40: [いや たぶん 2]
06 今のままいくと その もう1個のやりたくないほうの@@
07 J37: あ:: [そか. 先生に@@ ああ]
08 J40: [あんまり好きじゃないほう@@] で
09 書くかと思うんですけど::
10 J35: @@

候補話題に対して否定的反応を受けた際、候補話題を差し替える事で話題化をはかろうとする例もある。例6では、J40がJ38の卒業後の進路についての話題を導入している(01-02行)。しかし、沈黙の後の03-05行でJ38が「ちょっとどうなるかわからないですよ」と返答をする。3秒の沈黙とそれに引き続く「うーん」という時間を稼ぐ発話から、この発話は非優先返答(Schegroff, 2007)の特徴を示しており、候補話題がJ38に肯定的に受け入れられていないことが分かる。しかしそれに引き続いて、傍参加者のJ41が、「〇〇大でもう教えられているんですか?」と問い返している。これはJ38が「現状で大学で教えてい」る(04行)と述べたことを受けての発話である。この発話によって「大学を出た後、どうするのか」という話題から、「現在〇〇大で教えているのか否か」という話題に候補話題が差し替えられる。これが契機となり、07

行以降で J38は「大学での教歴」について詳しく語り始める。このように、候補話題に相手が否定的な反応を示した場合、より受け入れられやすい候補話題へと差し替えることで話題の再導入が行われていく例もある。

例 6 JA2 (非優先返答による話題拒否、差し替えによる候補話題の再導入)

01 J40: でも (.) 大学を出られた後はどうするとか

02 そういうことは考えているんですか↑

(3)

03 J38: う:::ん (1) どうなんでしょうね↑

04 現状 その 大学で教えていますけど(1)

05 ちょっとどうなるかわからないですよね.

06 J41: あ〇〇大でもう教えられて [いるん] ですか↑ ← (再導入)

07 J38: [いや]

08 あの〇〇大は なんかこういうのが((注:本録画))はいるので

09 よくないのかもしれない [けど] あれです

10 J41: [あ:::]

11 あなんかそういう

12 J38: 学籍がある人間は その大学では教えられないので

13 その大学では.

14 J41: <WH ふ::ん WH>

5.2 News announcements による話題導入

話し手が自分から候補話題を語る news announcements による導入も、本データには多く見られた。News announcements は、宇佐美・嶺田 (1995) で論じられた「叙述型」の話題導入とほぼ一致すると考えられる。彼らの研究では、日本語初対面会話では、話題導入の型は「質問型」(本研究での itemised news enquiries にあたるもの) が大半であり、「叙述型」は少ないことを示唆していた。しかし本データにおいては、叙述型に当たる news announcements

も非常に多く見られた³⁾。

News announcements においても、候補話題がすぐに話題化される事例と、段階的に話題化される事例が見られた。さらに、候補話題が肯定的に受け止められ話題化していく場合と、否定的に受け止められ交渉が長引いたり、話題が頓挫する場合が見られた。

以下の例7では、それ以前の箇所では就職活動の話題が出ていたのを受けて、J35が人格(キャラクター)を作り変えて就職活動に臨む人の話題を導入する(01-02行)。この候補話題はJ40の「あー」という重複発話で受け入れられる(03行)。この発話はJ35の発話が終わるより前に発せられたことで、J40は既にその情報を知っており関心があることを示している。さらに、J37も「ああ、ああ」とあいづちを繰り返し関心が強いことを示す。これらの肯定的発話が topicalizer となり、この候補話題はすぐに話題化され語られていく(05行-)。

例7 JA6 (重複発話、繰り返しのあいづちによる話題化)

- 01 J35: なんかあの 就活に合わせて もう1回全部なんか
02 自分のキャラクターを作り替える的な [話が] 変な話をしますが
03 J40: [あ:::] ← (Topicalizer)
04 J37: あ:: あ:: ← (Topicalizer)
05 J40: なんか こないだ 就活で話すネタがないから
06 Google プラスを使って 写真を撮ってアップ [ロード]
07 しまくってたとかっていう人いましたね。
08 J35: [あ]
09 あ::見ました。

例8も、候補話題が肯定的に受け入れられてすぐに話題化される例である。J37は、自分が教員養成課程にいた時の話を候補話題として語り始める(01, 03行)。J37が話し終わる前に、J40が重複しながら「ほう、ほう」と強い興味を示し(04行)、これが topicalizer となってこの話題は話題化され語られる。

例 8 JA6 (重複発話、繰り返しのあいづちによる話題化)

- 01 J37: なんか(.) あの教員養成課程に
 02 J35: [はい]
 03 J37: [俺] いたんすよ. [学部の] とき.
 04 J40: [ほうほう] ← (Topicalizer)
 05 J37: それでだいたいみんな小学校の先生になっていく [ような]
 06 J35: <WH [うん] WH>
 07 J37: とこあったんですけど なんか去年おもしろいことがあって
 08 絶対受かるだろうって言われてたいわゆる先生っぽい人達が
 09 みんな落ちたんすよ. [教員] 採用試験に.
 10 J35: [ほう]
 11 J40: へえ::

一方、news announcements にも段階的話題導入が見られる。例 9 では J42 がまだ運転免許を持っていないという候補話題を導入する。候補話題は、はじめは「はい」(03行)、「うん」(06行)等の最小限の反応で受け止められるだけである。しかし、J42は、段階的に話題を導入し続ける(01-02, 04-05, 07行)。08行で J36が「へえ」と驚きの声を上げ、これが topicalizer となって、3人は免許のない生活の不便さを話し始める。(09行-)

例 9 JA3 (段階的話題導入)

- 01 J42: で<WHちなみにWH> 俺なんかもうこっち来てから免許(.)を
 02 18で取る気満々だったんですけど
 03 J36: はい
 04 J42: 何となく取らなくて(.)で こっち来て全く不要だから
 05 普通にスーッと流しちゃって
 06 J36: うん
 07 J42: いまだ免許がないっていう.

- 08 J36：へえ ← (Topicalizer)
- 09 J42：で 最近困ったのが 免許がないとめちゃくちゃ田舎なのに
10 行動範囲がくそ狭まるっていう
- 11 J36：@@
- 12 J40：確かに(1) 車ないとつらいですよ [田舎は1]
- 13 J36： [ふ::ん1]
- 14 J42：[だから2]
- 15 J36：[そうですね2] なんか
- 16 J40：三重 三重もたぶんつらいと思いますよ.@@

このように news announcements の話題導入では、あいづちの繰り返し、重複発話、驚きや関心の表現等、参加者達の肯定的評価が topicalizer として機能することが多い。

一方、質問が topicalizer として機能する例もある。例10では、美大生である J35が「美大生には変な人が多い」という候補話題を導入する (01-02行)。J34が05行で「アーティスティックな？」と、美大生がどのように変なのかの詳細情報を求める質問を行う。この問いは候補話題への興味を示しており、それが topicalizer となり J35は美大生がいかに変人かを話し始める (06行-)。

例10 JA5 (質問による話題化)

- 01 J35：あでも美大生とかいうと逆にほんとに
02 変な人多いですよ 普通に.
- 03 J43：[へえ]
- 04 J35：[たぶん] 言ったら
- 05 J34：アーティスティックな ↑ ← (Topicalizer)
- 06 J35：いや アーティスティックっていうふうにしたぶん
07 美大入った時点で(.) まそういう人ばかりじゃ
08 ないんですけどなんかせんになん思想じゃないけど選ばれた感が

09 どっかに入ってきているんですよ。

一方、導入者と他の参加者の間で、話題の承認について誤解が生じていたと思われる事例もある。例11では、J37がコミュニティ作りについての候補話題を導入し（01-04行）、その話題について1人で話し始める。しかし、他の2人は、話題の最後まであいづちや相手の発話の一部の反復を行うだけで、ほとんど発言を行わず、気まずい雰囲気が流れる。これは topicalizer の解釈が、導入者と他の2人の間で異なったためだと考えられる。それには J37が多用している「～じゃないですか」という文末表現が影響していると考えられる。J37は話題導入の最後で（04行）で、「コミュニティを作るじゃないですか」と相手との情報共有を前提とする文末表現（吉川，2002）を用いる。それに対して、J35は相手の発話を繰り返す形で「作ります」と反応する（05行）。それが J37には topicalizer と解釈され、話題の承認を得たと一気に話し始めたと思われる。J37は随所で「～じゃないですか」という表現を発し、他の参加者はそのたびに J37の発話の一部を反復したり（18行「ああ、文化」）、つられて「うん」（22行）と肯定的反応をしている。しかし、これは必ずしも話題を承認した訳ではなく、その表現につられてあくまでも共有情報を持っていることを認めただけであろう。しかし J37には話題承認と解釈されてしまったようである。そのため1人でどんどん話し始め、他の2人は口を挟めなくなってしまった。この例は、他の参加者からの承認が無いままに話題を進めると、参加者の間で話題は共有されず、一方通行の気まずい会話になることを示している。

例11 JA6 （話題の承認が無い一方通行の会話）

- 01 J37：なんかその アバターとか使った(.)
 02 なんてんですか SNS [って]
 03 J35： [はい]
 04 J37：1つのコミュニティを作るじゃないですか。
 05 J35：作ります。

06 J37: え で なんていうんですかまあそういう
07 あのアバターとかアプリケーションのほうにはそんなに
08 あのか何ですか あの 知らないんですけど全然
09 J35: はい.
10 J37: コミュニケーションあじゃない コミュニティ
11 づくりみたいなことにちょっと関心があって
12 J35: はい
13 J37: で、(1) まあ自分の研究 とは違うんですけど
14 あの::(1) 何ですかね その コミュニティが
15 どういうふう_に作られるのかみたいな 研究が
16 まああって で (1) なんか文化って
17 言うじゃないですか [文化1].
18 J35: [あ::1] [文化2]
19 J40: [うん2] うん
20 J37: で文化が違うコミュニティとかってもんが
21 けっこう日常よくいるじゃないですか
22 J40: うん
23 J37: それってまあ そもそも何を意味するのかっていうのは
24 ちょっと良く分からないですけど (.) 日本文化アメリカ文化とか
25 J35: うん
26 J37: あと○○大の文化
27 J40: うん
28 J37: とか △△大の文化とかっていうじゃないですか
29 まそれってそもそも何を言うのか分かんないじゃないですか
30 でも (.) で (1) ちょうどなんかアメリカで
31 あのサンディエゴでやってるんですけど
32 メキシコ人文化 [メキシコの]
33 J35: [うん]

- 34 J37: まあ 移民がいっぱいいるので (1) のその コミュニティと
 35 あとまあサンディエゴに住んでるアメリカ人白人文化
 36 っていうのを こう 合体させたようなコミュニティを作ろうっていう
 37 まあ試みがあるんですよ。
 ((この後も J37が一人で話し続ける))

News announcements の形で候補話題を導入した場合でも、他の参加者がその話題に否定的反応を示し話題化しない事例もある。例12では、J24が大学と家の往復しかしない生活についての話題を導入する (01行-)。しかし、他の2人はその話題に対してかすかに笑ったり (04行)、「うん」と反応する (06行) だけで、積極的な反応を示さず候補話題はなかなか話題化されない。J24は、相手の反応を引き出そうと自分の生活についての情報を小出しに語り (03, 05, 07行)、また、短いポーズで相手の反応を伺うが (03, 05, 07行) topicalizer は発せられず、07行目の後では2秒のポーズでも他の2人は反応をせず沈黙が生じてしまう。その後も J24は話題を導入し続けるが (08-09)、かすかな笑い (10行) や「そんなもんじゃないですか」 (11行) という気のない返事しか得られず、19行目でこの話題は途切れて沈黙が生じ、そのまま話題は終わってしまう。このように topicalizer となり得る驚きや関心を示す発話を行わないことで候補話題への否定的反応が示され、結果として候補話題は却下されることとなる。

例12 JA1 (否定的反応による候補話題の却下)

- 01 J24: ○○大 (.) 行っても (1) さい 最近 修論書いてるんで
 02 J25: あ::
 03 J24: 行って帰って (.) みたいな
 04 J26: @
 05 J24: 寝て (1) 11時ごろ来て
 06 J25: うん

- 07 J24: 4時ぐらいに帰る (1) それの繰り返しです.@
(2)
- 08 J24: これどう (.) なんもんなんも
09 ○○大に最近、ざいしてないなあ@
10 J26: @
11 J25: もう そんなもんじゃないですか↑@
12 J24: そんなもん.
13 J25: 研究室にいると 研究室が9割みたいな
14 生活になるって
15 J24: 研究室10割ですもん.
16 J26: 10割@
17 J25: 残りの1割が 授業があるからですよ.
18 J24: あ::::::::::::それは確かにそうですけど
19 J26: <WH 確かに WH>
(2)

5.3 分析結果

以上では、参加者達が話題を導入するために様々な交渉を行う様子を見た。まず、導入発話に関しては、Button & Casey (1984, 1985) で指摘された3つの話題導入のプロセスの中の topic initial elicitors の事例は見られず、itemised news enquiries と news announcements が多様されていた。本稿と同じ日本語の初対面会話を扱った宇佐美・嶺田 (1995) のデータでは、話題の導入には質問形式が大半を占め、叙述形式は少ないという結果が出ていた。しかし、本データには、宇佐美らの質問形式に匹敵する itemised news enquiries だけではなく、叙述形式に匹敵する news announcements も多く見られる結果となった。これは、彼らの分析が会話開始から3分間を対象としているのに対し、本稿はそれより遙かに長い30分の会話であるため、初対面とはいえ時間の経過に伴い参加者達がある程度慣れ親しんだことで、導入プロセスの傾向に違いが

出た可能性がある。事実、news announcements は、会話の後半でよく使用されていた。

話題導入発話後のプロセスを見ると、例1のように候補話題が即座に話題化される事例は、本データではまれであった。ほとんどの事例では、参加者の間で何らかの交渉を経て話題化が行われていた。ただ、その交渉は比較的短い場合もあれば（例2, 4, 7, 8, 10）、何度ものターンを費やして相手の反応を見ながら段階的に導入される事例（例3, 9）もあった。また、候補話題が話題化されるには、その契機となる topicalizer が必要だが、それは様々な方策を用いて示されていた。相手との重複発話、「ほう、ほう」「あー、あー」のような繰り返しのあいづち、関心を示す質問、共話などが見られた。いずれも、候補話題への興味や関心を示す発話である。

また、topicalizer が参加者の間でうまく理解されず誤解が生じた場合は、話題が一方通行になり、全員が話題を共有できない事態も生じていた（例11）。

さらに、候補話題は会話参加者の間で常に肯定的に受け入れられる訳ではなく、時には否定的に受け取られる場合もあった。候補話題が好まれない場合は、非優先的応答などによって示されていた。そしてその場合は、話題の具体化や話題の差し替え等による候補話題の再導入により話題化が試みられていた（例5, 6）。しかし、それにもかかわらず受け手達が関心を示さず、候補話題が話題化せず結局は却下される事例もあった（例12）。

また、多人数会話データの特徴として、話題導入者とその受け手だけではなく、傍参与者の働きが話題導入に大きく寄与している事を明らかにできた。傍参与者は、時には候補話題を差し替えたり、具体化したり、topicalizer を投げかけたりなどの働きをして話題の導入に寄与していた。

このように、話題導入のプロセスを詳細に見ることで、候補話題が話題化、あるいは却下されるには、会話参加者達が多様な方策を用いて交渉している様子を記述できた。（図2）

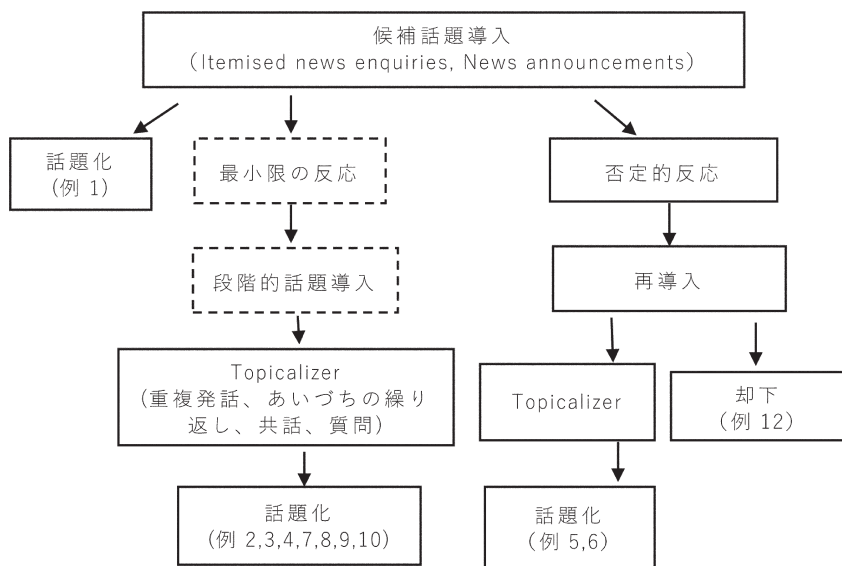


図 2 本データに見られた話題導入・却下のプロセス（破線は任意）

6. 考察

本稿の会話データの特徴は、初対面会話であることと、交流会話（雑談）（尾崎・椿・中井，2010）であるということである。初対面の会話は、相手に関する情報がない点、また人間関係が構築されていない点が既知の者同士の会話とは異なる点である。三牧（2013）は、初対面の会話に関して「コミュニケーションを円滑に進行させるために心的距離を接近させると同時に、疎である相手に対する配慮から一定の距離を保持するという、相反する要請が明白な場面である」（p. 5）と説明している。一方で交流会話とは、パーティーでの会話、立ち話での会話、食事の席での会話などのいわゆる「雑談」を指す。この種の会話は制度的場面の会話とは異なり、参加者間で明確な会話の目標があるわけではない。掘田（2016）は雑談を、情報伝達機能を担いつつも、制度的

場面の会話以上に対人関係機能を大きく担うと説明している。

つまり、本データのような初対面の交流会話は、背景知識を全く持たない相手と情報を交換しつつ、一定の距離を保ちながら心的距離を近づける事が求められる場面といえる。初対面交流会話の話題導入はその端緒であり、「情報交換の開始」と「適切な心的距離の維持」という2つの機能の遂行が求められている。

この2つの観点から上記の分析結果を考察する。まず話題導入発話を見ると、本稿では topic initial elicitors は一度も見られなかったが、これは受け手にとって負荷の高い話題導入となるからだと考えられる。Topic initial elicitors の受け手は、自分の好きな候補話題を選択することは可能であるが、一方で参加者間で共有できる適切な話題を提示しなくてはならない負担を負う。初対面で心的距離の大きな相手にこのような負担を負わせる話題導入発話を選択することは、対人関係上好ましくないと考えられよう。そのため、本データには topic initial elicitors は出現しなかったと考えられる。逆に、itemised news enquiries と news announcements は導入者自らが候補話題を提示するため、topic initial elicitors と比較すると受け手への負担は少ない話題導入となる。そのため初対面会話では、相手との関係性への配慮から選ばれやすい話題導入発話だと考えられる。

次に、itemised news enquiries で始まる相互行為について考える。候補話題に対して受け手が即座に話題化を行う事例が見られたが(例1)、相手が提示した候補話題を即座に受け入れるという行為は、相手との心的距離を近づけると考えられる。一方、話題導入者が段階的に話題導入を行う事例(例3)は、導入者が受け手の話題領域に一気に踏み込まず、相手との心的距離を保とうとする配慮だといえよう。また、段階的話題導入では、受け手側も当初は最小限の返答を返すだけで、即座に話題化がされない事例もある(例2,3)。この反応も、即座に話題化が行われる例1と比較すれば、相手との一定の心的距離を保とうとする振る舞いだといえる。これに対して、傍参与者や話題導入者が topicalizer として関心や驚きを示す発話で話題化をはかろうと試みるが(例

2, 3)、これは相手の発話への興味表明として機能し、相手との心的距離を縮める役割を果たしている。Itemised news enquiries への返答に参加者達が共話を用いている例では(例4)、共話は共通の認識を示すストラテジーであるため、参加者間の心的距離を縮める機能となっている。一方、例5や6のように、受け手が itemised news enquiries に消極的の反応を示し話題化が進まない事態も生じる。その際、他の参加者は候補話題を具体化したり差し替えたりして再導入することで、より話題化されやすい方向に会話を進める。これは相手により関与しやすい候補話題を導入する振る舞いであるため、相手への積極的な働きかけであり、心的距離を近づけようとする試みであろう。

News announcements では、話題導入者が自ら語る候補話題が相手の関心や興味に沿うか否かは不確実である。そのため、そのような不確実性を抱える話題導入者に向けて発せられる重複発話、あいづちの繰り返し、質問などによる topicalizer は、単に話題化を促すだけではなく、候補話題への関心、興味、共通認識を示し、導入者との心的距離を近づける機能を果たす(例7, 8, 9, 10)。そのため、大きな声の、重複が大きい、素早い topicalizer ほど心的距離を近づけるのにより効果的に機能すると考えられる。一方、このような topicalizer が発せられないままに話題を進めようとすると、参加者の間では承認がないまま話題が進むこととなり、心的距離を近づける事は難しくなるであろう(例11)。さらに、候補話題が承認されない事例もあり得る(例12)。候補話題の不承認は、導入者の話題を否定することになるので相手との心的距離を大きく隔てる。しかし一方で、明示的な不承認ではなく、かすかな笑いや最小限のあいづち等によって不承認をほのめかしている点は、心的距離の隔たりを最小限にとどめる配慮であろう。

このように、話題導入のプロセスには、初対面の相手との心的距離を調節する様々なストラテジーを見ることが出来る。初対面会話の話題導入とは、単に話題を導入して情報交換をするためのプロセスの問題だけではなく、情報交換を行いながら参加者間の心的距離を調節するという2つの機能のせめぎ合いの場であるといえる。

7. まとめ

従来の研究では話題導入のプロセスを類型化するものが多かったが、話題導入から話題化までのプロセスをミクロな視点で見ることによって、それらの型が成立するまでに、どのような相互行為が行われているのかを詳細に示す事ができた。また、話題を導入しつつ相手との関係に配慮を行うという難しい課題を、参加者達が協働しながら行っている様を記述できた。

しかし本稿の分析は8組の日本人の男性会話に過ぎない。ここで明らかになった様々な相互行為がどの程度まで普遍的なのか、たとえば、女性の初対面会話や他言語の初対面会話でも同様の現象が見られるのかを、今後明らかにする必要がある。

注

- 1) 「限られた反応」とはメイナード (1993) による表現で, McLaughlin & Cody (1982) の ‘minimal response’ をメイナードが「限られた反応」と訳したものの。話題を否定も進行もさせない発話を指す。
- 2) 話題の境界の決定の詳細については、大谷 (2018) を参照のこと。
- 3) 宇佐美・嶺田は、30分会話の最初の3分のみを分析対象としている。

参考文献

- Abu-Akel, Ahmad (2002). The psychological and social dynamics of topic performance in family dinnertime conversation. *Journal of Pragmatics*, 34 (12), 1787-1806.
- Bergmann, Jörg R. (1990). On the local sensitivity of conversation. In Markava, Ivana & Foppa, Klaus (Eds.), *The dynamics of dialogue*, pp. 201-226. New York: Harvester Wheatsheaf.
- 坊農真弓・高梨克也 (2009). 多人数インタラクションの分析手法 オーム社
- Brown, Gillian & Yule, George (1983). *Discourse analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Button, Graham & Casey, Neil (1984). Generating topic: The use of topic initial elicitors. In Atkinson, J. Maxwell & Heritage, John (Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis*, pp. 167-190. Cam-

- bridge: Cambridge University Press.
- Button, Graham & Casey, Neil (1985). Topic nomination and topic pursuit. *Human Studies*, 8 (1), 3-55.
- Foppa, Klaus (1990). Topic progression and intention. In Markava, Ivana & Foppa, Klaus (Eds.), *The dynamics of dialogue*, pp. 178-200. New York: Harvester Wheatsheaf.
- 掘田秀吾 (2016). フォコンテクストの雑談：模擬裁判員裁判での評議における談話の分析 村田和代・井出里咲子 (編) 雑談の美学：言語研究からの再考, pp. 3-21. ひつじ書房
- 河内彩香 (2003). 日本語の雑談の談話における話題展開機能と型 早稲田大学日本語教育研究, 3, 41-55.
- Kerbrat-Orecchioni, Catherine (2004). Introducing polylogue. *Journal of Pragmatics*, 36 (1), 1-24.
- 串田秀也 (1997). 会話のトピックはいかに作られていくか 谷泰 (編) コミュニケーションの自然誌, pp.173-212. 新曜社
- 林河運 (2008). 日韓初対面会話の質問による話題導入の対照研究：ポライトネスの観点から 現代社会文化研究, 41, 149-166.
- McLaughlin, Margaret L. & Cody, Michael J. (1982). Awkward silences: Behavioral antecedents and consequences of the conversational lapse. *Human Communication Research*, 8 (4), 299-316.
- メイナード泉子, K. (1993). 会話分析 くろしお出版
- 三牧陽子 (2013). ポライトネスの談話分析：初対面コミュニケーションの姿としくみ くろしお出版
- 南不二男 (1981). 日常会話の話題の推移：松江テキストを資料として 藤原与一先生古稀御健寿祝賀論集刊行委員会 (編) 藤原与一先生古稀記念論集方言学論叢 I 方言研究の推進, pp. 87-112. 三省堂
- 村上恵・熊取谷哲夫 (1995). 談話トピックの結束性と展開構造 表現研究, 62, 101-111.
- 中井陽子 (2002). 初対面母語話者／非母語話者による日本語会話の話題開始部で用いられる疑問表現と会話の理解・印象の関係：フォローアップ・インタビューをもとに 群馬大学留学生センター論集, 2, 23-38.
- 大場美和子 (2012). 接触場面における三者会話の研究 ひつじ書房
- 大場美和子・中井陽子 (2018). 会話データ分析の初学者による話題区分の特徴の分析：分析手法の指導に向けて 社会言語学会第41回大会発表論文集, 154-157.
- 大谷麻美 (2018). 日・英語の初対面会話における話題の連鎖と展開：共-選択の観点からの分析 社会言語科学, 21 (1), 96-112.

- 尾崎明人・椿由紀子・中井陽子 (2010). 日本語教育叢書「つくる」: 会話教材を作る スリーエーフットワーク
- Reichman, Rachel (1978). Conversational coherency. *Cognitive Science*, 2 (4), 283-327.
- Sacks, Harvey (1992). *Lectures on conversation*. Cambridge, MA: Blackwell.
- Schegloff, Emanuel A. (2007). *Sequence organization in interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tannen, Deborah (1990a). Gender differences in conversational coherence: Physical alignment and topical cohesion. In Dorval, Bruce (Ed.), *Conversational organization and its development*, pp.167-206. Norwood, NJ: Ablex Publishing Corp.
- Tannen, Deborah (1990b). Gender differences in topical coherence: Creating involvement in best friends' talk. *Discourse Processes*, 13 (1), 73-90.
- 宇佐美まゆみ・嶺田明美 (1995). 対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン: 初対面二者間の会話分析より 名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集, 2, 130-145.
- 宇佐美まゆみ・野口芙美・木林理恵 (2014). 初対面二者間会話における話題導入と展開のプラクティス: 対話相手との年齢差・性差に着目して 第71回 言語・音声理解と対話処理研究会資料, 23-28.
- West, Candace & Garcia, Angela (1988). Conversational shift work: A study of topical transitions between women and men. *Social Problems*, 35 (5), 551-575.
- 楊虹 (2005). 日本語母語場面の会話に見られる話題開始表現 人間文化論叢, 8, 327-336.
- 楊虹 (2011). 中日母語場面の初対面会話における話題開始の比較: 参加者間の相互行為に注目して 立命館言語文化研究, 22 (3), 185-200.
- 吉川達 (2002). 「～じゃないですか」という表現について 山口国文 25, 70-61.

【付録】文字化記号

データの文字化については Du Bois 他 (1993) を参考に、本研究の目的に合せ一部変更、簡略化した。

- | | |
|------------------|---------------|
| ↑ 上昇調イントネーション | @ 笑い |
| (1) ポーズ 数字は秒数を表す | (.) 1秒以下のポーズ |
| ○○△△ 固有名詞 | [発話の重複開始箇所 |
|] 発話の重複終了箇所 | [1] 発話の重複のペア |
| <WH WH>つぶやき | :: 直前の音の引き延ばし |
| = 発話が密着している箇所 | (()) 筆者注 |